

小池光歌集

『サーベルと燕』

(砂子屋書房)

二〇一八年から二二年までの歌を纏めた第十一歌集。この間百六歳になる母を送り、一つ下の弟を肺がんで亡くす。母に続き弟の突然の死は衝撃だった。挽歌が続いた後の一首が胸に迫る。

実のひとつ葉のひとつさへなくなりし柿の木を照らす冬のひかりは

人名が最多で、茂吉が多い。中でも斎藤茂吉が最多で、茂吉を深く敬愛していることが伝わってくる。

七十歳で死にたる斎藤茂吉より年上となり歌がほろほろ

平明で、解釈に苦しむような歌はない。日々の暮らしを詠んだ歌はユーモアとペーソスに満ちている。

ペーソスに満ちている。ペーソスに満ちている。ペーソスに満ちている。

ながら赤いきつねを食ふのも一生  
日常のふとした折に、十二年前亡くした妻のことを思いだす歌がある。

「国境なき医師団」に月々わづかなる金おくりぬし妻をおもふも

妻の歌は読者が忘れかけた頃にひっそり置かれ、哀感を誘う。(人見 江一)

松村由利子著

『ジャーナリストと謝野晶子』

(短歌研究社)

パリでル・タン紙の取材に「婦人の最上の職業は新聞記者」と答えた晶子。短歌のみならず評論集も十五冊を上梓し、特に大正デモクラシーの時代の活字メディアの隆盛のなかパワフルな執筆活動があった。有名歌人・文化人の立場から辛口コメントターとして、また多くの子どもを持つ母親の声を言葉にする者として社会から発言を求められ、国家権力から遠い大阪の商家出身の気骨からも危険思想すれの主義主張で検閲、発禁の言論統制に立ち向かい短歌や社会批評をぶつけてゆく。

報徳思想流布、大逆事件、女性運動、スペインかぜ、ロタンと会談するなど十九世紀末芸術、高島屋百選会、文化学院の創設

：当時の最先端の潮流を捉え、男女共同参画、生涯学習、ワークシェアリング、著作

権などの現代によく取り組んでいた。それは常に真の民主主義社会を理想とし、国民全体の自由と平等を求める姿勢で一貫。読後、

晶子の眼で新聞を見直したくなる。

(白川ユウコ)

川本千栄著

『キマイラ文語』

(現代短歌社新書)

副題は「もうやめませんか? 「文語」/口語」の線引き。

古語であったはずの文語は、短歌革新運動の時代に、古語と近代語との「ミックス文語」となった。

文語・口語に対する精緻な歴史的論考が、軽妙な筆致でなされ読者を引き込む。

近現代文語体には、その一部、主に動詞や助動詞に文語が残っているため、口語からの類推で実際には存在しない活用語を作り出してしまっていることがある。

作歌の上で日頃から気になっていたことを探究してゆく具体が興味深い。

「SNSと第二の言文一致」では、デジタル・ネイティブ世代にとって

は、書き言葉と話し言葉の重なりは前世代に比して相対的に大きい。

と、深い洞察力と把握で論じる。収録されている座談会も読みごたえがある。ニューウェーブ世代の歌人たちを語り、

大松達知ら複数の歌人が話題に上る。

本書は、時代を生きる言葉に真摯に寄り添う一冊である。(柴田 佳美)